

## 第45回 歴史リレー講座「柳澤香山侯の暮らし—宴遊日記—」 岡本 彰夫氏 (H30.6.17)

今回のテーマについてお話しする前に、当時の大名たちがどのように暮らし、どんな思いで日々職務に励んでいたのかをまずご紹介いたします。このプロセスを経なければ「宴遊日記」をより深く理解して頂けないと考えたからです。「宴遊日記」そのものについては来年の講座で詳しくお話ししますのでご期待下さい。

「香山」は江戸時代の郡山藩 2代藩主信鴻のぶときが出家した際の法名です。祖父は、文化学問を奨励した 5代將軍綱吉を支えた吉保。柳澤家はもともと武田信玄の家臣だったこともあり、金を豊富に産出する甲府を領地として渡されています。ただ、綱吉の絶大な信頼を誇る半面、妬みにも苛まれたようで、綱吉と吉保亡き後、息子の吉里は享保 9年に郡山藩へ国替えされます。甲府では 21万石を誇った柳澤家も郡山では 15万石という苦しい生活。しかし、京都所司代と大阪城代は、いつなるとき攻め込まれるかわからない大和に恐れをなしていました。そのため幕府は大和全体の 50万石をばらばらに配分することで勢力を分散したのです。

吉里こののぶの四男が伊信です。彼は 50歳を過ぎると長男の保光りくぎえんに家督を譲り、最愛の側室を連れて駒込の六義園に移り住みます。「信鴻」は伊信が隠居をきっかけに使い始めた名です。その日常生活を綴ったものが「宴遊日記」。彼は今で言うメモ魔で、些細な出来事まで正確かつ細かに記しているため、現代の研究者にとっては貴重な史料です。大名たるもの散財は当たり前なこと、やたら喜怒哀楽を顔に表してはいけないこと、家臣を大事にすることなどを幼少時から徹底的に躾けられていたことが綴られています。私はこの日記を読んで、お殿様のホンネに驚き、幼な子を描いた情景に心打たれたものです。文字解釈は歴史の掘り起こしの基本ですが、それだけでは無味乾燥な代物になってしまいます。さらに喜怒哀楽などの情までも考慮する必要があると実感した次第です。また、「松鶴日記」は側室亡きあとの出家後に認めたものです。

現代において江戸時代の事柄はほとんど研究対象になっていません。資料が多すぎて整理に膨大な時間がかかること、それを正確に読み解く職人のような学者の不在などが大きな要因です。私の祖父はギリギリ江戸時代の生まれでしたが、私たちが現代生活の基本となる江戸時代の生の情報を得ることは不可能です。今のうちに記録をたどり、書き残しておかないといずれ埋もれてしまうことは必至でしょう。

江戸の人々の日常を描いた書や文学作品は数多く残っています。例えば岡本綺堂の『半七捕物帳』は物語の面白さはもちろん江戸の郷愁や細やかな風情に心を奪われますし、学術的にも価値の高いものです。また、三田村鳶魚えんぎよがつぶさに聞き取り、柴田宵曲しょうきよくが文章にまとめた『幕末の武家』(昭和 46年刊)の中で元広島藩主の侯爵浅野長勲ながことは「大名の日常生活」を率直に語っています。浅野は明治維新後に外務省の役人として活躍した人物。聞き取りが始まるやいなや浅野が発した言葉は「大名などするものではありません」でした。大名暮らしの窮屈さがうかがい知れるエピソードではありませんか。

その中身は生活の多岐にわたります。將軍謁見の厳しいしきたり、玄関で控える刀番の苦勞、献上品のこと、道中で大名が行き合う際のマナー、駕籠の中の布団は意外にも薄いこと、食事、衣服、入浴時の苦勞、睡眠不足、側医による朝の診察、婚礼の風習などなど…。なかでも 1万石以上の大名に 1年おきに課される参勤交代の際はどんな悪路であろうと一切の生活用具を準備して参府しなければなりません。肉体的にも金銭的にも相当な苦勞が伴ったようです。平常の食事でも質素なうえ、好みの品ばかりではなかったようです。ある日の食事に、なんと鼠の糞が紛れ込んでいましたが、なにかと理由を捻り出して浅野侯は特別に赦しています。さらに、親といえどもいったん家督を譲れば口出し無用。親子対面の際も厳格なしきたりが求められました。生活のあらゆる場面において形式でがんじがらめの我が身に対する不満が垣間見えると同時に、家臣を思いやる浅野老侯の人間味もじわりと伝わってくる内容です。